

## 【総合書物論】

# 第1回 philology と総合書物学

講義担当 谷川恵一（国文学研究資料館名誉教授）

### ■総合書物学は何を目指すか

残されたことばを手がかりとしてギリシャなどの古典古代の文明を探究してきた philology というヨーロッパの人文研究のディシプリンと日本が出会ったのは明治になってからです。最初は「博言学」と訳された philology に「文献学」ということばを対応させたのは上田敏で、1896年のことでした。新村出の回想などから、この頃、東京大学やその周辺で philology への理解と関心が一定のひろがりを見せていたことが推定されます。

「文献学」という訳語が与えられた philology は、東京大学の国文学科の教授である芳賀矢一によって本居宣長らの国学の伝統と重ね合わされ、明治時代の終るころに日本文学研究を中心とする「日本文献学」という総合的な学問の構想へとたどりつきます。今日でも日本文学研究者がときどき文献や文献学ということばを用いるのはこうした歴史があるからです。村岡典嗣や和辻哲郎などが展開した思想史・文化史における研究をはじめ、新村出の日本語や日本文化についての幅広い仕事も含め、philology の日本への移入はけっして日本文学研究にとどまるものではありませんでした。「文献学」ということばを避けた和辻は、philology に「文学」ということばをあてて philology を実践していたのです。

「日本文献学」という総合的な学問への構想がついえ、「文献学」という名称とともに日本文学研究という領域に局限されることになった philology は、ナショナリズムを前面に掲げつつ、選ばれた古典作品を対象としたテキスト・クリティークへと収斂していくこととなります。第二次世界大戦後には、西郷信綱らを先頭に、そうした研究のあり方は非人間的な営みだとして激しく批判されます。今日の日本文学研究者は、もはや「文献学」を国学と直結させることはありません。わたしたちは、「文献学」ということばによって、池田亀鑑の源氏物語の本文批判などを思い浮かべ、それを写本で伝わった古典作品を研究するための基礎的な一方法と理解しています。

こうした地味な響きをもつ「文献学」ということばに慣れきったわたしたちには、ポスト構造主義やポスト・コロニアリズムといった最新の研究モードの旗手であったポール・マンやエドワード・サイードたちが異口同音に「文献学」への回帰を唱えたことは、驚きであり、理解しがたいものでした。意味を産出する前のことばの運動に直に向き合う

ことを求めたかれらの「文献学」とわれわれの「文献学」との落差は、philology と「文献学」のそれであり、われわれはもういちど philology に溯って考え直してみる必要があります。

philology は、ことばと意味、対象となることばやその他の資料とそれらにもとづく研究との間にある隔たりを認識し、両者をつなぐための適切な技法について思いをめぐらせる営みでした。philology を異なった言語をまたぐ翻訳とむすびつけたフランスの言語学者ジョルジュ・ムーナンの独創的な主張は、philology の核心をついています。いいかえれば、philology によって、意味と切断されたことば、研究の対象となる資料そのものがはじめて見出されたのであり、それらを収集し、整理・比較し、精読していくことが philology の基本的な任務でした。山口昌男による、既成の学問の分野にとらわれない「知識の存在形態（収集・保管・創造）の一つとしての学問」（『本の神話学』）の要請も、サイドなどとはまた違った意味での philology への回帰であるとみなすことができるでしょう。philology がそうであったようなこうした「通分野的」（山口）な知の営みに、日本文学研究に局限された歴史をもつ「文献学」という名称はふさわしくありません。

総合書物学とは、日本近代における philology の移入を批判的にとらえかえし、philology を基盤として人文学の新たな「知識の存在形態」を模索していく試みです。

幸田露伴の『水上語彙』（1897年）や柳田国男の「史料としての伝説」（1925年）などは、日本文学研究以外の領域においてなされた、わたしたちの試みにとって貴重な先例です。これらについて紹介しながら、来るべき総合書物学の姿をさぐってみたいと思います。

今日 web 空間の中に出現しつつある膨大な資料＝書物は、その圧倒的な量によって人文学研究の細分化に拍車をかけていますが、既成の知の枠組みに囚われない新たな研究を産み出すための有力な母胎ともなりうるでしょう。そのためのプロセスを考え、さまざまに試みていくのが総合書物学の果たすべき一つの役割です。

## ■「偶然記録」の探究へ向けて——共通科目「総合書物論」

書物には、その本が著述されたそもそもの目的やその本が属するジャンルを越えた、さまざまな人間の営みや生活がたたみ込まれている。たとえば日本文学のジャンルに属する『万葉集』は和歌集であるが、収められた歌には 200 近くの植物が詠まれ、その中にはどのような植物なのか同定が困難なものが数多く含まれていて、現在も科学史家たちによる研究が続けられている。文学作品や絵画に描かれた住まいについても同様で、住居の構造を記録しておくことが作品の目的でないばあいでも、そこからある時代の人びとが生活した家屋がどのようなものであったかを読み取ることができる。

書物や記録がもつこうした後世へ情報を伝えるはたらきを柳田国男は「計画記録」と「偶然記録」という呼び方で区別し、「文字を筆者の計画した以外の問題を明らかにするため援用する」「偶然記録」の利用を推奨している（『郷土研究と文書史料』、『郷土生活の研究法』1935年）。たとえば『東海道中膝栗毛』を用いて「馬方の道義観念」という問

題を明らかにすることを柳田が例としてあげているように、あらゆるテキストや図像には「偶然記録」が含まれている。それは、科学史や建築史といったすでにある研究分野にとっての「偶然記録」であるばかりでなく、まだ出現していない分野の「偶然記録」でもある。

かつて中国の沿岸を脅かした倭寇の事蹟に取材した小説を書こうとした幸田露伴は、『和漢船用集』をはじめさまざまな「雑書」から海上での人々の営みに関したことばを拾い集めその語義を添えた備忘録を作成した。結局この小説は書かれなかったが、露伴がこしらえた備忘録は『水上語彙』と題して1897年に刊行されている。アイウエオ順にことばを掲出した『水上語彙』は、アで始まる語だけでも80余りの、『言海』などの辞書類には載らないことばを取っていた。この本を見て発奮した柳田が四十年ほど後に『分類漁村語彙』をまとめていることからすると、「偶然記録」を活用するという柳田の発想そのものも、露伴の試みにその端緒があるといっているのかもしれない。

『水上語彙』は、露伴全集とは別に、露伴の遺稿集である『露伴蝸牛庵語彙』(1956年)に収められたが、その後記で土橋利彦は、「辞書」と題した1895年の露伴の文章を引いている。

吾が邦に元来辞書少し。近き頃や、体裁を具へたるものも出でぬにはあらざれど、要するに「書物より造りし書物」に過ぎず。源氏狭衣の中に死語を索めなば直ちに得んも、日常用ひ居れる語は或は洩れたり。例へば、乗合の京の奴、かきたつより顔さし出し、と近松の書きたる其かきたつとは如何なる義か、(…)言海などに就きて其語を索むるに、其語の影だにあること無し。(…)卒然として今の謂はゆる辞書に臨む時は、如何に著者等が古文学乃至本草学等に忠実なるに比しては、如何に工業農業等に対して冷淡不信実なることよと感ぜざるを得ず。これ全く辞書の作者の罪にはあらず、古来の風潮のこれをして然らしめしのみにはあれど、如何にも口惜しきことにはあらずや。今の辞書を以て日本を觀んには、恰も日本には工業商業農業等は殆んど無かりしものと云ふを得べきなり。

近松門左衛門の作品の一節「かきたつより顔さし出し」の「かきたつ」を『水上語彙』は「舟の左右に立つ垣」と説いているが、こうした「工業商業農業等」民衆の日常に用いられたことばは、江戸期に進展した国文学(「古文学」)や博物学(「本草学」)などの成果の上に立った『言海』には採られていない。露伴が「書物より造りし書物」といって『言海』を批判するのは、源氏物語や狭衣物語などの江戸期以来の学問の対象となってきた「書物」ばかりに目を向けていることをいっているのであって、「雑書」も「書物」に数えていいのであれば、『水上語彙』もまた「書物より造りし書物」であるには違いなかった。露伴を助けて『水上語彙』の作成に携わった石井研堂の書き入れのある『水上語彙』が長崎大学の武藤文庫に残っていて、そこには、出版に際して省かれた一々の出典を記した『水上語彙』の稿本を研堂が所持していると記されている(国文研：近代書誌・近代画像データベース)。

本から本をつくるという簡単なようだが、露伴の博識と、のちに『漂流奇談全集』(1908

年)・『異国漂流奇譚集』(1927年)としてまとめられる漂流記の調査研究を続けていた研堂の篤学との稀有な結びつきによってなったのが『水上語彙』であって、誰にでもできる芸当ではないことはもちろんだ。ただ、漂流を扱った写本の探索におびただしい労力を費やさなくてはならなかった研堂の時代にくらべ、研究の環境は劇的に変化した。残された膨大な書物を対象として、それらを「偶然記録」として活用し人文学をより豊かなものにしていくための試みを開始する条件は揃っている。柳田も述べているように、ある時代に当たり前であったことをその時代に属する人びとはわざわざ書き残したりしない。「偶然記録」を手がかりにしてそれらを明らかにするにはどのような手続きや方法が必要となるのか、歴史的典籍 NW 事業の一環として人間文化研究機構で実施している共同研究「異分野融合による総合書物学の構築」の成果を踏まえ、総合研究大学院大学の文化科学研究科の共通科目「総合書物論」は、個別の研究分野を越えた取り組みから学んでいく。

#### 〈文献一覧〉

- 新村出「言語学概論」、岩波講座日本文学、1933 [昭和 8] .4  
新村出「藤代素人博士を憶ふ」、『琅玕記』、1930 [昭和 5] .5  
上田敏「細心精緻の学風」、『文芸論集』、1901 [明治 34] .12、春陽堂。初出は『帝国文学』  
2 卷 8 号 (1896 [明治 29] .8)  
芳賀矢一「国学とは何ぞや」、1904 [明治 37] .1-2、『國學院雑誌』  
『芳賀矢一遺著 日本文献学・文法論・歴史物語』、1928 [昭和 3] .10、富山房  
和辻哲郎『ホメーロス批判』、1946.11、要書房。  
西郷信綱『国学の批判—封建イデオログの世界—』、1948.3、青山書院、第三章「新しい  
学問の主体」二「国文学の前近代性」(p.201-202)  
西郷信綱「日本文学史の方法的反省」(杉捷夫編『文学史の方法の諸問題』1951.6、学風書  
院)  
ポール・ド・マン『理論への抵抗』(大河内昌・富山太佳夫訳、国文社、1992.5)  
Paul de Man, *The Resistance to Theory*, 1986. 「文献学への回帰」  
E.W.サイード『人文学と批評の使命—デモクラシーのために』(村山敏勝・三宅敦子訳、  
岩波現代文庫、2013.9) E.W.Said, *Humanism and Democratic Criticism*, New York,  
2004.第二章「人文研究と実践の変わりゆく基盤」・第三章「文献学への回帰」  
ジョルジュ・ムーナン『翻訳の理論』、伊藤晃他訳、1980.5、朝日出版社  
山口昌男『本の神話学』1971.7、中央公論社  
幸田露伴『水上語彙』『智徳会雑誌』40号、1897.7。のち幸田文編『露伴蝸牛庵語彙』  
(1956.12、新潮社)に収める。  
柳田国男「史料としての伝説」『史学』第4巻2号、1925.5。のち柳田国男『史料としての  
伝説』(1957.10、村山書店)に収める。